

大学文書館展示(第8回)

入学と卒業

いまむかし



(上写真)大正2、3年頃のドイツ語学科教員と卒業生 (1913年頃)

○開催期間:2013年3月19日~5月上旬(予定)

○場所:附属図書館1階ギャラリー

【参考資料】『東京外国語大学史』

1. 進級・卒業の条件 ～140年の変遷～

本学最初の校則『外国語学校教則』(1873年4月文部省正定)には、「卒業」の文字はなく、

第十一条 通弁ノミヲ学フ者上下二等ノ教科ヲ卒ル時ハ大試業ヲナシ免状ヲ与フベシ

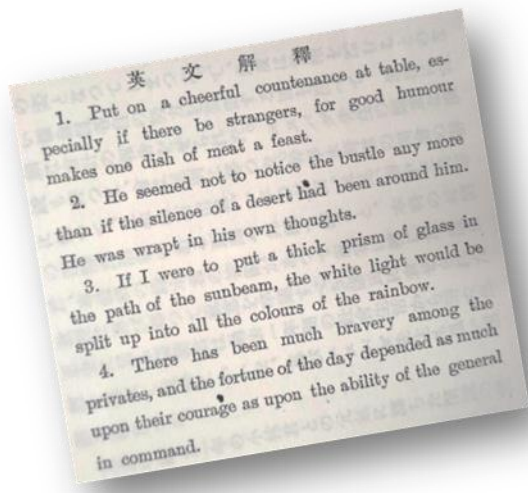
と定められていました。卒業試験に当たる「大試業」の内容は不明ですが、その後の校則改訂の中で、期末試験・学年試験が整備されてゆくことになります。

1876年の校則では、「試業」と呼ばれた試験では綴字、書法、読法、訳読などの授業の各項目が「優・佳・可・平・低・劣・拙」の7段階で評価され、合計点に基づき、各語科における席次が付されました。

また1880年の校則では、

第一条 試業ニ学期試業及毎週試業ノ二種アリ学期試業ハ学年中各学期ノ終(日数十日間)ニ於テ施行シ毎週試業ハ各学期中毎週ノ終(土曜日二時間)ニ於テ施行スルモノトス

と定期テストに加え、「毎週試業」という毎週のテストが課せられていました。今以上に緊張感のある学生生活の様子が伺えます。



(上)明治43年度本科入学試験問題

4. 東京外国語大学の入学・卒業

1949年(昭和24)、新たな学制施行に伴い、4年制の東京外国語大学が誕生します。

戦後、国立大学では全国一律の「進学適性検査」の施行(1949～54年)、一期校・二期校の大学別入試期日への変更が行われ、本学は二期校に属しました。

本学では外国語への関心の高まりを背景に、入学志願者が急増し、発足初年度の2.76倍から、年々の倍率は高まり、1955年(昭和30)には24倍にも達します。

最も人気の高かった英語科では、この年70名の定員枠を2877名の志願者が争い、41.1倍という受験倍率を記録しました。



(左)昭和38年3月14日入学式写真



(左)露語科の首席であった

二葉亭四迷(長谷川辰之助)

1881-1885年に本学露語科に在籍した二葉亭四迷は優秀な成績を収め、首席に位置していました。



(右)佛語科成績表(1875年)

成績表には、試業で課せられた綴字、書法、読法、訳読の各項目について6～0点で採点されました。成績表には合計点と席次が付されました。

2. 東京外国語学校(1899～1944年)時代の入学試験

明治期の校則の中でも、入学に関する規程は度々変更されました。1899年の校則では中学校卒業者は無試験で入学できましたが、二年目の1900年の校則では、入学者の「学力ノ均齊」を図るため、入学者に対し一斉試験が課されるようになります。その後、徐々に入学志願者が増加してゆく中、入学試験は恒常化してゆきます。

1904年の校則では、試験科目が定められ、「国語漢文」「地理歴史」「外国語」の3科目の試験が課せられました。

3. 戦争と卒業

日露戦争の際、東京外国語学校では「陸海軍通訳ノ需要」に対応するため、卒業試験の繰り上げ実施し、夏期休暇を廃止しての特別講習が実施されました。

また昭和に入り戦局が悪化すると、学生は「学徒出陣」として戦地に赴きます。1941-43年度の入学者の八割を超える学生が出陣学徒となりました。



(上)1948年東京外事専門学校 卒業記念